

社会認識を深め、根拠をもとに意思決定できる児童の姿を目指した社会科指導のあり方
～資料を読み取る力を高める指導を通して～

1 設定理由

平成26年度の全国学力・学習状況調査の調査結果からは、「立場や根拠を明確にして話し合うことについて、発言する際は一定の立場に立ってはいるが、根拠を明確にした上で発言する点に依然として課題がある。」とされている。

今日、社会は急速に変化を遂げ、グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。その一方で複雑かつ困難な課題も多く生み出している。生活の中で生じた課題や現代の社会のあり方について良い、あるいは良くないとする価値判断を自ら行い、根拠を明確にして意思決定できる能力の育成が求められていると感じる。

これらのことから、今回の研究では、児童が資料を読み取る場面に着目し、資料の傾向や特徴から読み取れる事象を見出す場面で、児童の社会認識を深められるようにしていきたい。資料の読み取りを通して深めた社会認識をもとに、価値判断を行う場面を計画的に設定することで、児童は根拠をもとに意思決定を行うことができると考え、本主題を設定した。

2 研究仮説

第5学年の「我が国の農業」の学習において、以下の2点について手立てを講じれば、根拠をもとに自分なりの考えを示し、意思決定ができるようになるであろう。

(1) 資料の読み取りの場に重点を置いた指導

(2) 資料を根拠に、自分なりの考えを示す場面の設定

3 研究内容

○ 私たちの生活と食料生産―農業の盛んな地域―

(1) 資料の読み取りの場に重点を置いた指導の実践

(2) 日本の農業の抱える課題について、自身の考えを資料を根拠に発表する実践

4 結論

○ 複数の資料を関連づけて読み取る力、必要な資料を収集したり選択したりする力を高めることができた。

○ 児童は資料から読み取った情報を根拠に、自分の考えを述べることができた。

○ ゲストティーチャーとも連携し、日本の農業の抱える課題を、資料の読み取りを通して児童自らが見出したことで、課題を自分事として捉え解決にあたることができた。

1 研究主題

社会認識を深め、根拠をもとに意思決定できる児童の姿を目指した社会科指導のあり方
～資料を読み取る力を高める指導を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

平成26年度の全国学力・学習状況調査の調査結果からは、「立場や根拠を明確にして話し合うことについて、発言する際は一定の立場に立ってはいるが、根拠を明確にした上で発言する点に依然として課題がある。」とされている。

今日、社会は急速に変化を遂げ、グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。その一方で複雑かつ困難な課題も多く生み出している。生活の中で生じた課題や現代の社会のあり方について良い、あるいは良くないとする価値判断を自ら行い、根拠を明確にして意思決定できる能力の育成が求められていると感じる。

(2) 児童の実態から(5年生 男子10名・女子13名 合計23名)

児童は、5年生までの学習を通して、資料の読み取りの経験を積んできてはいるが、一つの資料から複数の情報を見出したり、資料を関連づけたりする活動への経験は少なく、資料の読み取りに関して苦手意識を持っている児童も多にいる。

今回の研究では、児童が資料を読み取る場面に着目し、資料の傾向や特徴から読み取れる事象を見出す場面で、児童の社会認識を深められるようにしていきたい。資料の読み取りを通して深めた社会認識をもとに、価値判断を行う場面を計画的に設定することで、児童は根拠をもとに意思決定を行うことができると考え、本主題を設定した。

3 主題について

○社会認識

社会認識とは社会科を教科として成り立たせる知的活動領域であり、社会科教育の成果として子どもの内面に形成される社会事象に関する知識体系である。認識・知識は大きく事実的なものと価値的なものに分けられるが、本研究ではまず、グラフ・写真・絵などの資料をもとに、児童の事実的認識・知識を深められるようにしていきたい。「社会科教育辞典 日本社会科教育学会【編】」によると事実的認識・知識は三つの層構造をもつとされている。

第一層 個別的記述的知識	第二層 個別的・説明的知識	第三層 一般的説明的知識
「いつ、どこで、だれが、だれに、何を、どうして、どうなったか、何が、どうであったか」など、事象の構成要素や展開の過程に関する知識。	「社会的事象が生起した原因や条件」「その機能」「生起の結果や影響」「意味や定義」「個性や本質」など、事象に見られる諸事実を因果的に関連付けていくことによって説明される。	社会の個別的事象を説明し予測するものであり、社会の見方考え方であり、法則・理論である。他の事象に転移することのできる知識。

本研究では、第一層児童の「個別的・記述的知識」を資料の読み取りの場面を通して増やし、得た知識を関連づけていくことで、児童の社会認識は深まっていくと考える。

4 研究目標

資料の読み取りの場面に重点を置いた指導を行い、児童の社会認識を深める。そうすることで、児童一人一人がこれまでの学習で得た知識を活用し、資料を根拠に自分なりの考えを示すことができることを実践を通して明らかにする。

5 研究仮説

第5学年の「我が国の農業」の学習において、以下の2点について手立てを講じれば、根拠をもとに自分なりの考えを示し、意思決定ができるようになるであろう。

- (1) 資料の読み取りの場に重点を置いた指導
- (2) 資料を根拠に、自分なりの考えを示す場面の設定

6 研究構想

- (1) 資料の読み取り能力を高める手立てを活用した指導

5年生で求められる、資料を読み取る力（学習指導要領解説より）

〔5年〕 観察調査

- ・ 資料から必要な情報を読み取る。
- ・ 資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。
- ・ 複数の資料を関連づけて読み取る。
- ・ 必要な資料を収集したり選択したりする。
- ・ 資料を整理したり再構成したりする。

以上の力を身につけさせるために、児童の資料の読み取りの場では以下のような支援・手立てを行っていく。

資料の読み取りへの支援・手立て

グラフの読み取り	写真・絵・図の読み取り
・ グラフの題の確認 ・ 縦軸、横軸の確認 ・ 数値の単位の確認 ・ 最大、最小の数値の確認 ・ 全体ではどのような傾向の確認 ・ 大きな変化をしているものの確認 ・ 変化の小さいものの確認	・ 資料の一部分を拡大し、視点を絞る。 ・ 何をしている資料かの確認 ・ 資料の全体の傾向を確認 ・ 資料の一部分を隠し、何があるかを予想させる ・ 資料を見せる前に、見るべきポイントを明示する

これらの支援・手立てを行うことで、児童は「複数の資料を関連づけて読み取る」「資料を整理したり再構成したりする」といった資料を読み取る力を高めることができる考える。

本単元では、資料の読み取りの基礎的な力を身につけさせるために、必要な情報が整理された教科書・資料集に掲載されている資料を使用した。

(2) 意思決定を行う場面の手立て

○日本と旭市の農業を取り巻く現状及び課題を見出させる。

単元の中で、旭市で農業法人を行っている方をゲストティーチャーとして招き、農業の現状と、抱える課題に関する資料を示し、農業の抱える課題について見出させる。「高齢化や後継者不足で、生産者数が減少していること」、「地産地消の推進が上手くできていないこと」などの課題について見出させる。

子どもたちが資料をもとに自ら課題を見出すことで、日本の農業の課題について向き合い、考えようとするだろう。

○日本の農業の課題について、考える場面を設定する。

日本の農業の課題解決に向けて、生産者や国がどのように取り組んでいるかを外部講師に話をしてもらう。「法人化を行い、大規模農業を進め、海外に日本の農作物を輸出する」「個人で小さく行う農業を推進し、地産地消を推し進める」という大きな二つの取り組みを紹介し、それぞれのメリットとデメリットを考える。児童にはどちらの方針を日本の農業は目指していくべきか、または別の手立てはないかを考えさせる。

それぞれの意見の、メリットとデメリットを併せて考えることで、児童は根拠をもとに意思決定を行おうとするだろう。

7 研究の実際

(1) 第5学年 社会科

単元名 私たちの生活と食料生産－農業の盛んな地域－（10時間扱い）

(2) 単元の目標

○ 社会事象への関心・意欲・態度

農産物の生産の様子に関心をもち、意欲的に調べるとともに国民生活を支えている農業の発展を考えようとしている。

○ 社会的な思考・判断・表現

日本と地域の食料生産の課題が共通していることに気づいたり、農業の抱える課題について、どのような解決方法があるか考えたり、学習したことをもとにして表現したりすることができる。

○ 観察・資料活用 of 技能

農産物の生産に従事している人々の工夫や努力、運輸の働きについて、地図や統計など各種の資料を活用して、必要な情報を集めて読み取ることができる。

○ 社会的な事象についての知識・理解

農業が国民の食糧を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることについて理解できる。

(3) 学習活動の概要 (10時間扱い)

時	学習活動と内容 (扱った資料)	□指導・支援
1	○旭市の田の広がり様子と、庄内平野の田の広がり様子を衛星写真から比較する。(衛星写真) ○水田が占める割合とほ場整備が終わっている面積の割合の庄内地方と日本全体との比較を行う。 (水田が占める割合と、ほ場整備が終わっている面積の割合の円グラフ) 庄内平野の米づくりについて調べてみたいことを考え、学習問題を作ろう。	□旭市と酒田市の衛星写真を3種類の倍率で比較させる。 □水田が占める割合とほ場整備が終わっている面積の割合の円グラフから庄内地方の特徴を押さえさせる。 ・割合の意味を押さえる。
2	○米づくりに適した条件を確認する。 なぜ庄内平野は米づくりに適しているのだろう。 ○同じ緯度の酒田市と宮古市の降水量・平均気温・日照時間を比較する。 (酒田市と宮古市の月別降水量・平均気温・日照時間の折れ線グラフ)	□米づくりに適した条件に庄内平野の気候があてはまるかどうかを、確認させる。
3	○前時の振り返りを行う ○米づくりに適した条件を確認する。 なぜ庄内平野は米づくりに適しているのだろう。 ○庄内地方の航空写真と土地利用図を見て、土地の広がりや川の流れる様子を確認する。 (航空写真・衛星写真・土地利用図) ○冬の季節風による砂の害と、それを防ぐ人の努力にふれ、次時以降の人々の工夫や努力につなげる。	□前時までの学習から日本海側の気候の特徴を押さえ、豊富な雪解け水があることを確認させる。 □海側と山側の土地の使われ方の違いに着目させる。
4	○米づくりの写真を並べ替え、作業手順を確認する。 農家の人の米づくりには、どのようにふうや努力があるのだろう ○水田の水の量の変化を図から読み取り、水の管理の大変さを知る。(水田の水の量の変化の図) ○稲作の作業時間の変化から、機械化により作業が早くなっていることを確認する。 (稲作の作業時間の変化のグラフ)	□米づくりの写真ごとにどんな作業をしているのかを想像させる。 □米づくり農家にとって、よい米ができるかどうかは生活の根幹を担う重要なことであることを押さえる。

5	○小型ヘリコプターによる農薬散布の写真からその長所について考える。(写真) なぜ、農家の人は協力して米づくりをするのだろう。 ○共同作業を行う長所について資料を根拠に記述する。 (農業機械の所有台数の変化のグラフ・米の生産費の変化のグラフ・土地改良による用水路や排水路の仕組み)	□前時の学習から、稲作の機械化が進んでいることを確認し、農業機械の所有台数の変化を予想させる。 □機械化が進んでいることに対して、所有台数が下がっていることから、機械を共同で使っていることに気づかせる。
6	○品種改良や機械の購入、営農指導の写真から、米づくりを行う上では農家の人以外の支えも必要であることに気づく。(写真) 農家の人たちを支える人にはどんな人がいるのだろう。 ○消費者の視点と生産者の視点からどのような米が望まれているのかを考える。(庄内平野で作られている米の品種の円グラフ・米の系統図) ○農家の人々を支える仕組みについてまとめる。	□営農指導の写真から、米づくりを支える人がいることに気づかせる。 □庄内平野で作られている米の品種に偏りがあることから、その土地や気候に適した品種があることに気づかせる。
7	○スーパーで売られている「つや姫」を例に、生産された米が手元に届くまでの経路を予想する。 (米づくりにかかる費用の円グラフ) 庄内平野で作られた米はどのように全国に届けられるだろう。 ○資料をもとに、生産された米が手元に届くまでの経路をノートにまとめる。 (庄内平野の米が全国に届くまでの経路図・カントリーエレベーターの中の図・庄内平野でとれる米の経路図)	□家で食べている米の銘柄など系統図に関心を持たせ、品種改良について関心を持たせる。 □近所のスーパーで買った「つや姫」の米袋を掲示し、どのような経路で旭市まで届いたのか予想させる。 □生産者だけではなく、輸送業者、卸業者、販売店など多くの人々を介し、手元に届くことに気づかせる。
8 9	○ゲストティーチャーから今の日本の農業の課題についての話を聞く。 (農業で働く人数の変化・稲の作付面積の変化のグラフ) 日本の農業はどのような問題を抱えているのだろう	□資料から農家の抱える問題を読み取らせる。

10	○前時までの学習を振り返り、これからの日本の農業について考え、意見を出し合う。 (農業で働く人の変化・農地所有適格法人の変化 など) 日本の農業・稲作を残していくためにはどうすれば良いのだろう。	□資料を根拠に、自身の考えを記述させる。
----	--	-----------------------------

【仮説（２）根拠となる資料をもとに、自分なりの考えを示す場面の設定】 に関する授業単元の後半（第８～１０時）では日本の農業の抱える課題を資料の読み取りを通して見出し、その解決策を考える活動を行った。児童は第１～７時までを通して高めた資料を読み取る力を通して、資料を根拠に自身の立場を明らかにしていった。
(８・９時)

日本の農業はどのような課題を抱えているのだろう

８・９時は旭市で有機農法で農家を営んでいる方をゲストティーチャーとして、日本の農業の抱える課題についての授業を行った。

 ゲストティーチャーによる授業の様子	授業で扱った資料 米の生産量と消費量の変化 庄内地方の総農家数と専業農家の割合 農業で働く人数の変化 (教科書より) 稲の作付面積の変化 １０アールあたりの米の生産量の変化 農地所有適格法人の数の変化 (資料集より) ※それぞれを電子黒板に拡大して掲示
--	---

当日は、ゲストティーチャーが授業の中で扱った農業の課題として次の４点が挙げられた。
①高齢化と農業で働く人の減少 ②地産地消の推進が図れていない ③米の値段の低下 ④米の消費が低下していること

児童の多くは、農家の米づくりの工夫を通して「作物がたくさんとれることは良いことだ」という考えをもっていた。しかし、「１０アールあたりの米の生産量の変化」のグラフをもとに、あまりにも多くの米がとれすぎると、米の値段が下がり、農業を離れてしまう一因となっていることを知り、児童からは驚きの声が上がっていた。

授業の中で、ゲストティーチャーを通して児童は、日本の野菜が世界の中でもトップレベルの品質を誇ることに、一度田畑を使わなくなってしまうと元に戻すのに３年以上の時間とコストがかかることや生きることを根幹を担う食料を他国に依存しすぎることは危険であることを知った。そして、日本の農業をこれからも維持し、発展させていくために解決策を考えていく必要があると感じ取った。

農業の抱える問題への解決策として、ゲストティーチャーからは2種類の方法が話された。以下にその二つを記す。

①一般の人が個人で作った野菜を売れるようにする。(小さな農業)			
長所	・地産地消が進められる ・面倒を見やすい	短所	・上手いかなくなった場合にすぐやめてしまう可能性がある ・海外展開はできない
②農業法人を増やし、大規模なものを増やしていく(大きな農業)			
長所	・海外に輸出しやすくなる ・全国規模で行える	短所	・面倒を見切れない可能性がある ・思うように売れない可能性もある

農地所有適格法人の数の変化のグラフをもとに、大手牛丼チェーンやハンバーガーチェーンを例にあげ話を進めたことで児童は農業法人に対する認識を深めていくことができた。授業の最後に、ゲストティーチャーからこれからの農業の抱える課題と、大切さについて考えて欲しいと投げかけられ、第10時の学習へとつながっていった。

(第10時)

日本の農業・稲作を残していくためにはどうすれば良いのだろう。

第10時では、日本の農業の課題に対しての解決方法を教科書・資料集から見出した資料を根拠に記述し、意見を交流する活動をし、単元の学習を終えた。

7 仮説の検証

(1) 資料の読み取りの場に重点を置いた指導

【アンケート結果】「とても思う」「思う」「どちらでもない」「思わない」「全然思わない」を5～1点換算

アンケート項目	1時	5時	10時
資料から必要な情報を見つけることができましたか	4. 2	4. 5	4. 4
資料を組み合わせることができましたか	3. 3	4. 0	4. 1
必要な資料を自分で選ぶことができましたか	3. 6	4. 2	4. 6

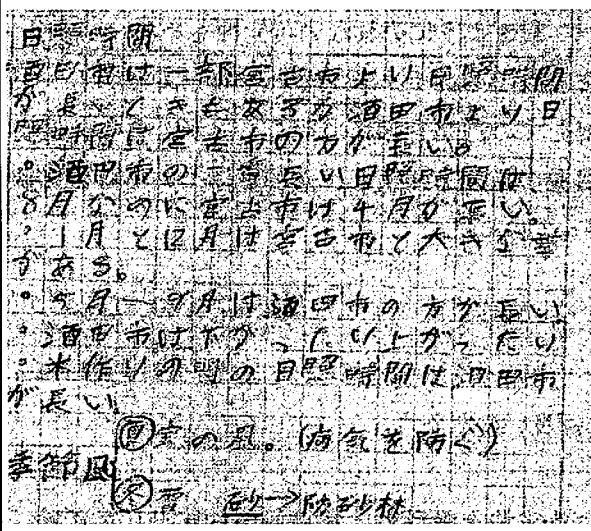
「資料を組み合わせることができた」「必要な資料を自分で選ぶことができた」と答えた児童が多くなった。単元の前半部分では資料の読み取りの基礎的な部分を教師主導によって行った授業であったが、単元の後半は前半部分で得た資料の読み取り方を活かし、資料を組み合わせることや必要な資料を選ぶことで自ら学習課題に取りかかった結果であると考えられる。

【授業での様子】

単元の前半部分(1～3時)では電子黒板を使い、資料の読み取り方を全体指導の中で時間を割いて行ってきた。写真・グラフ・地図などの資料の読み取りを通して、庄内平野が米づくりが盛んな理由を「自然条件・地理的条件」といった視点を与える発問から捉えることができた。全体での指導を授業の主軸においたことで、資料を読み取る際の共通理解を図ることができたが、反面多様な意見が出にくい授業となってしまった部分もあった。

単元の中盤部分（４～７時）は「生産者や農協の人々の工夫や努力」から米づくりが盛んな理由を探った。ここでは前半部分で得た、資料の読み取り方を活用し、個別に資料を読み取る時間を増やしていった。児童は学習問題に沿って資料の選択と読み取りを行い、意見交換も活発に行うことができた。前半部分と併せて得た個別的・記述的知識から「生産者や農協は、地理的条件や自然条件を活かし、品種改良や共同作業、流通などの工夫をしながら消費者のもとに米を届けている」という個別的説明的知識の社会認識を深めることができた。

【児童のノートから】



前半部分は資料の読み取りにより、個別的記述的知識を増やしている。（酒田市は一部、宮古市より日照時間が長い・酒田市の一番日照時間が長い月は8月で宮古市は4月）さらに個別的・記述的知識を統合し、「米づくりの時期の日照時間は酒田市が長い」という知識から、「庄内平野が米づくりに適している理由は、豊富な雪解け水、米づくりの時期に日照時間が長いこと、病気を防ぐ夏の季節風である」と認識を深めていくことができた。

庄内平野の気候に関する児童の記述

（２）根拠となる資料をもとに、自分なりの考えを示す場面の設定

【授業の様子から】

児童は単元の学習を進めていく中で、学習問題に対して資料を根拠に答えを導くことができるようになった。そこで、日本の農業の課題と課題解決に向けた取り組みにふれ、どうすれば課題が解決できるかを投げかけた。農業の課題に対して、児童は資料を関連づけたりしながら自分の考えを根拠をもとに導くことができた。

【児童のノートから】

８・９時の授業で問いかけられた、「日本の農業・稲作を残していくためにはどうすれば良いのだろう」という学習問題に対して、児童の記述は以下ようになった。

日本の農業・稲作を残していくためにはどうすれば良いだろう（全２３名）	
個人での農業を進める（小さな農業）	１４名
農業法人を進める（大きな農業）	９名

授業では、ゲストティーチャーから出された二つの考え以外にも、自分で考えたものを書いてもらいましたが、児童の考えはゲストティーチャーから出された二つの考えに分かれた。次に、それぞれの答えが、根拠をもとに導き出されているか、そしてどのような資料を根拠に考えを導き出しているか分析を行った。

選んだ資料	小さな農業（全14名）	大きな農業（全9名）
農業で働く人の変化	10名	7名
農地所有権法人の変化	1名	5名
稲の作付面積の変化	4名	0名
米の生産量・消費量・在庫量	0名	2名
おもな食料の輸入量の変化	1名	2名
おもな食料の自給率の変化	3名	1名
日本の国土の割合	1名	0名
資料を根拠にしなかった児童	1名	2名

最も多く扱った資料は、「農業で働く人の変化」のグラフであった。これは、この資料が8・9時の農業の課題についての学習の導入時に扱った資料であることとゲストティーチャーも「跡継ぎ問題」が大きな課題であることを話したことが要因として考えられる。

それぞれの資料をもとに、どのような根拠を導き出し、記述したかを分析する。

農業で働く人の変化	
小さな農業	大きな農業
人数が減っているの、個人で農業をややすくし、農業に関わる人を増やした方が良い。	会社やグループで行うことで、たくさん的人数で田畑の面倒を見ることができる。

農地所有適格法人の数		米の生産量・消費量・在庫量	
小さな農業	大きな農業	小さな農業	大きな農業
2015年以降は増えてないので、法人化は上手くいかない。（ゲストティーチャーの話を受けて）	2007年から2015年まで増え続けているので、上手くいっていると言える。	なし	日本の米は余っているの、それを海外に売れるようにすればいい。
おもな食料の輸入量の変化		おもな食料の自給率の変化	
小さな農業	大きな農業	小さな農業	大きな農業
輸入している食料を、自分たちで作れば売れる。	輸入している食料を自分たちで作れば売れる。	自給率の低い小麦や果物を地産地消で売るようにすればいい。	自給率を高くして余ったものを海外に売れば良い。

学級23名中20名の児童が、日本の農業の課題に対して、資料を根拠に自分の考えを述べる事ができた。また、半数を超える14名の児童が複数の資料をもとに根拠を見出す事ができた。これは単元の学習を通して、資料を読み取る力を高めたことで、児童が資料から自身の考えの裏付けとなる情報を見出すことができるようになったからであろう。

自分の提案 個人で農業をして、売れるように する 理由 資料集のグラフでおもな国の食料 自給率の変化は日本は90%から40 %までへ。このことから個人で農業 として売れるようにすれば上がる と思いました。	⑤日本の農業、稲作を残していく ためにどうすれば良いのかに 自分の提案 海外に売る 理由は20年から25年まで1.1人に 増えているから海外に売る 50年ほど前の昭和三十年代がよかった ように、たから海外に売って い
日本の農業を守る方法についての児童の考え 左：小さな農業 右：大きな農業	

左のノートは食糧自給率の変化から、食糧自給率の低下を根拠に自給率を上げるためにも、個人での農業を行いやすい体制を作り、農業を守っていく考えを示している。

右のノートは農地所有適格法人の変化と米の生産量・消費量・在庫量の変化のグラフを根拠に、自身の考えを述べている。農地所有適格法人が増加している傾向と米が余るようになってきている傾向から、将来を予測し、海外に売ることができる大規模農業が行えるのではないか、という考えを述べている。

9 結論

単元を通して、資料の読み取りの場に重点を置いた指導を行い、児童の社会認識を深めることができた。我が国の農業のこれからの在り方という問いに対して、児童はこれまでの学習で得た知識を活用し、自身の考えの根拠を資料から見出し、意思決定ができるようになったことから、この指導は有効であったと言える。

10 成果と課題

- 複数の資料を関連づけて読み取る力、必要な資料を収集したり選択したりする力を高めることができた。
- ノートの記述などから見て、児童は資料から読み取った情報を根拠に、自分の考えを述べることができた。
- ゲストティーチャーとも連携し、日本の農業の抱える課題を、資料の読み取りを通して児童自らが見出したことで、課題を自分事として捉え解決にあたることができた。
- ▲ 資料から必要な情報を見出す力を高めることはできたが、数多くの資料の中から、必要な資料を見つけることには支援を要する児童が多かった。
- ▲ 農業の抱える課題の解決策の多様性が見られなかった。児童が資料から多様な考えを導き出せるような手立てを考えていく必要がある。

社会認識を深め、根拠をもとに意思決定できる児童の姿を目指した社会科指導のあり方
～資料を読み取る力を高める指導を通して～

資料編

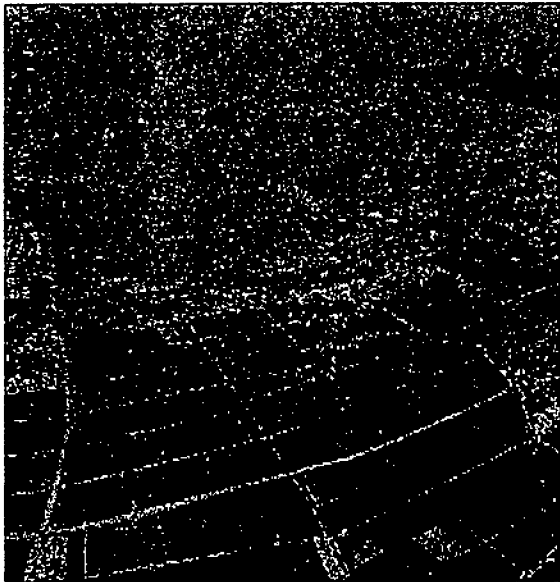
資料1	授業で扱った資料と教師の支援・児童の記述、発言・・・P. 1～6
	第1時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 1
	第2時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 2
	第3～4時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 3
	第5～7時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 4
	第8～9時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 5
	第10時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 6
資料2	ゲストティーチャーについて・・・・・・・・P. 7
資料3	参考文献・資料・・・・・・・・・・・・・・・・P. 7

授業で扱った資料と教師の支援・児童の記述、発言

【第1時】

教師

児童の発表・記述

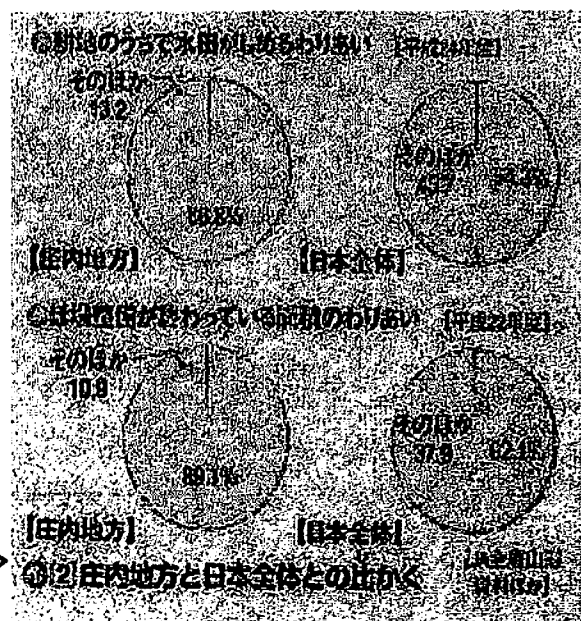


- ・写真の全体の様子はどうかな。
- ・田んぼの特徴はあるかな。
- ・大きさ広さはどれくらいだろう。

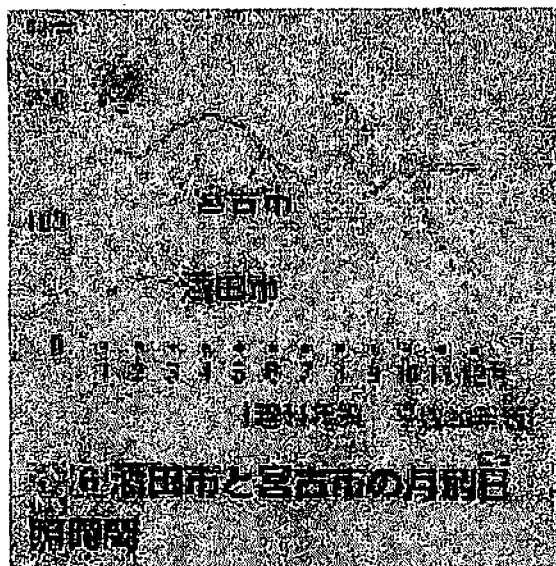
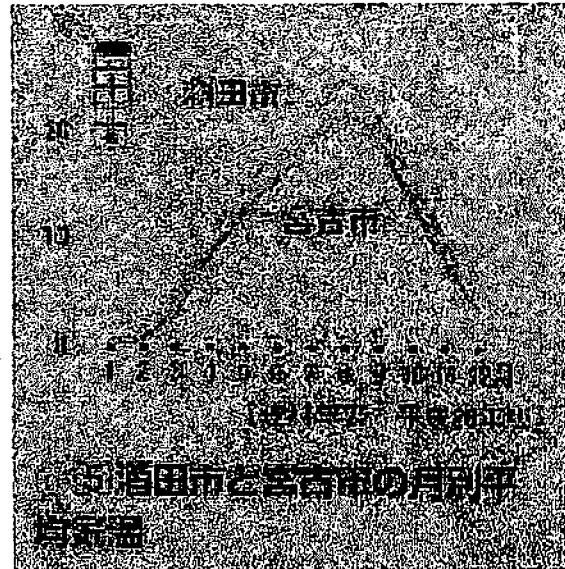
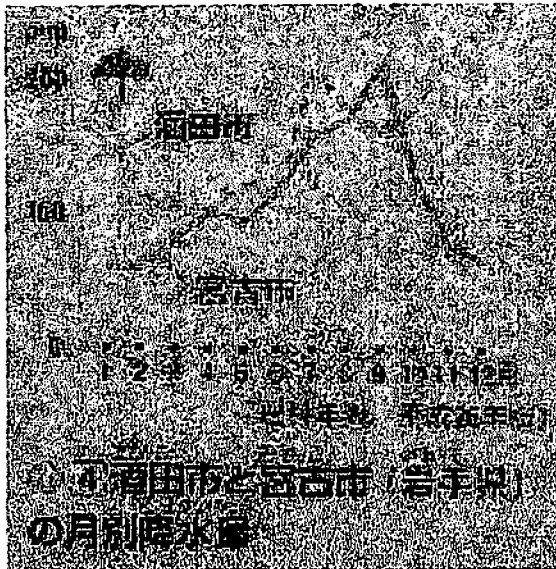
- ・住宅地の方が小さく見えるくらい水田が広い。
- ・山からずっと水田が続いている。
- ・ほとんどの水田が同じ形。
- ・縦に細長く、横幅が短い。

- ・旭市だけでなく、日本全体の様子と比べてみよう。
- ・日本全体の割合に対して、酒田市の割合は高い？低い？
- ・数値はどれくらいだろう

- ・米づくりが盛んだから高いと思う。
- ・写真で見たとおり、ほとんどが水田だ。
- ・耕地の80%以上が水田だから、やはり米づくりが盛ん。



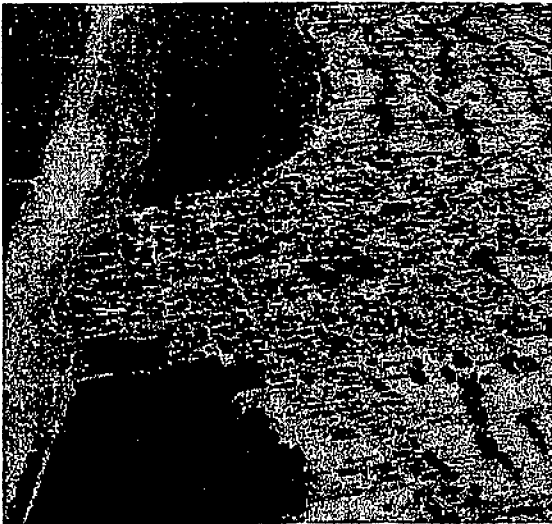
【第2時】



- ・宮古市と比べたとき、酒田市の降水量が多い時期、平均気温が高い時期、日照時間が長い時期はいつだろう。
- ・その時期は米づくりのどんな時期と関係しているだろう。
- ・理科で学習した植物の成長も思い出しながら考えてみよう。

- ・一年中酒田市の方が高く、特に6月～9月頃が高い。5月～9月が二つの市の差が一番出る。（月別平均気温）
- ・酒田市は6月～7月、11月～1月、宮古市は9月周辺が一番多い。
（月別降水量）
- ・酒田市は5月～9月が長く、1月～3月、10月～12月は短い。宮古市は1月～6月が長く、7月と9月が短い。（月別日照時間）

【第3時】



海側の航空写真

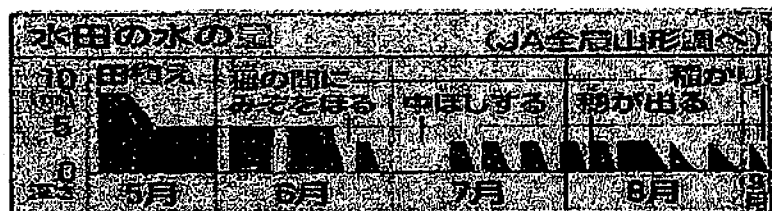
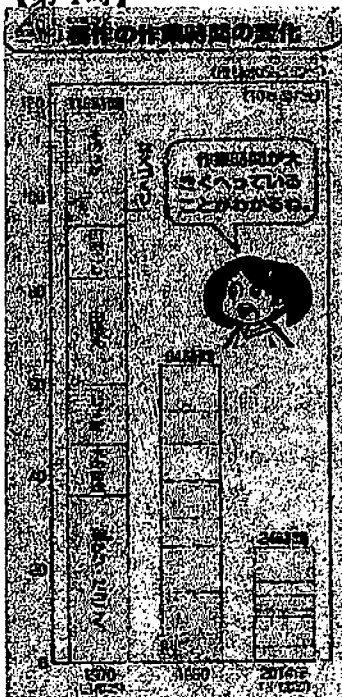


川側の航空写真

- ・それぞれの写真の全体の様子はどうなっているだろう。
- ・土地の使い方にどんな違いがあるだろう。
- ・片方の写真では見られないものはあるかな。

- ・海側は住宅地が多く、川側は水田が多い。
- ・一番海側にはずっと木がはえている。

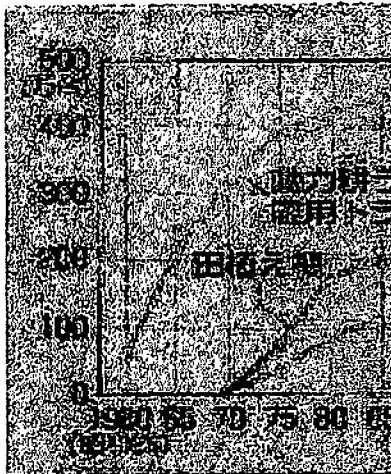
【第4時】



- ・大きく時間が減った作業何かな。
- ・あまり時間が減っていない作業は何だろう。

- ・機械化で作業時間が減った。
- ・水の管理の時間はあまり変化がない。
- ・水の管理は大変だが、それだけ大変なんだろう。

【第5時】



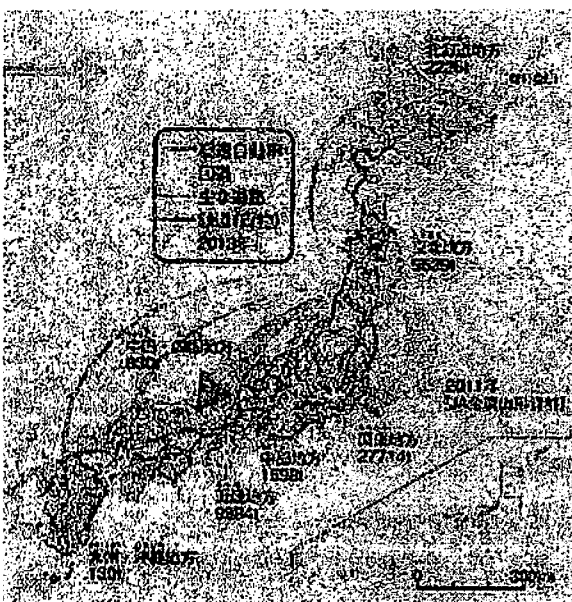
・この後所有台数はどのように変化するだろう。

・機械化が進んでいくのだから、所有台数も増えていくだろう。

・どうして機械化が進んだのに所有台数が減ったんだろう。

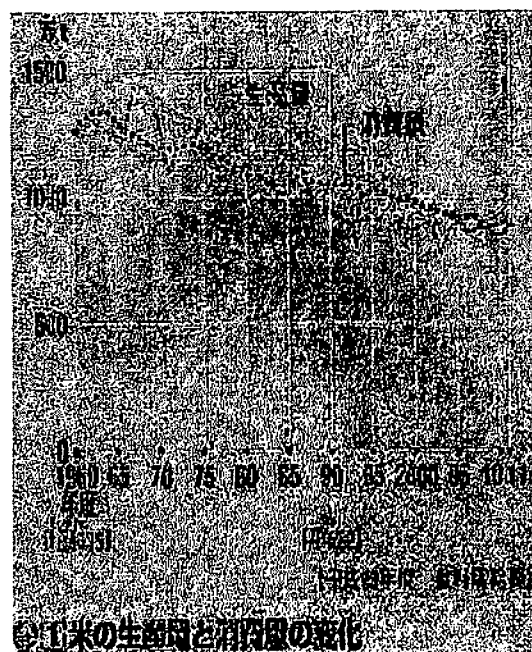
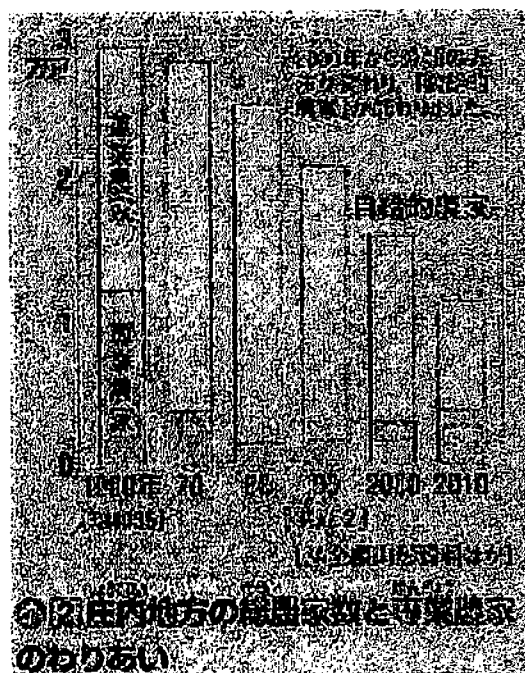
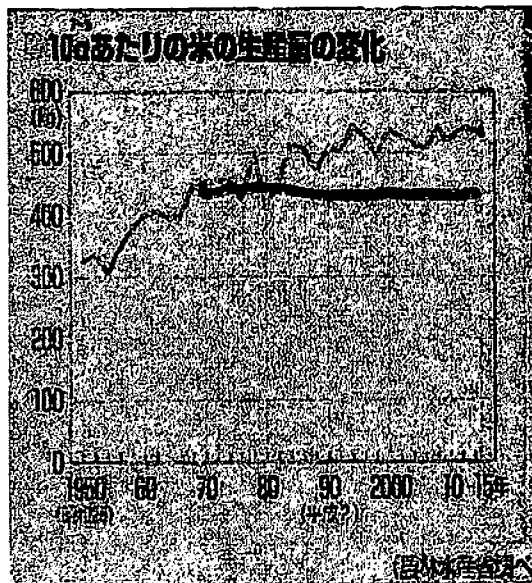
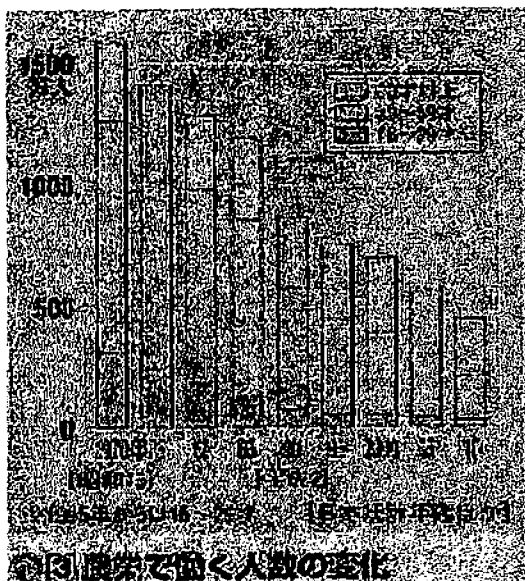


【第6・7時】



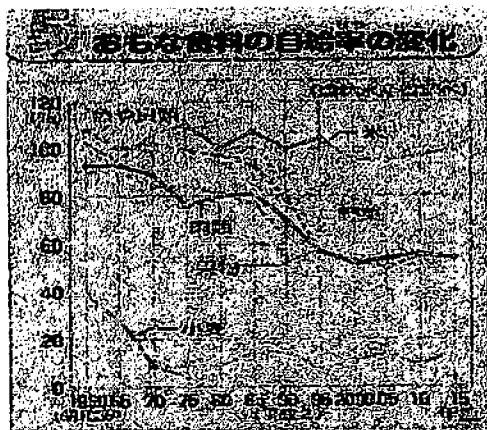
・関東地方に多くの米が輸送されている。
・近畿地方は遠いが、近くの東北地方より多く輸送されている。
・少しの量だけど、九州沖縄地方にも輸送されている。

【8・9時】



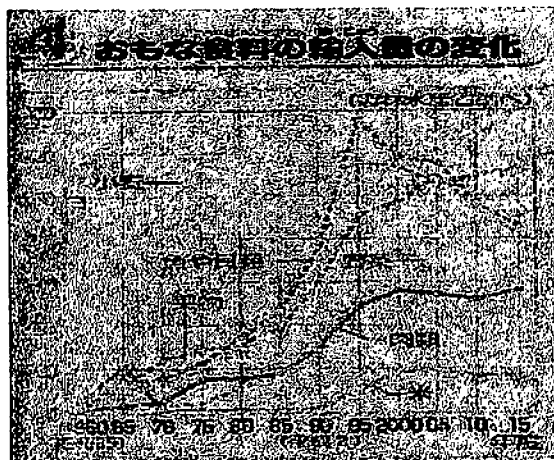
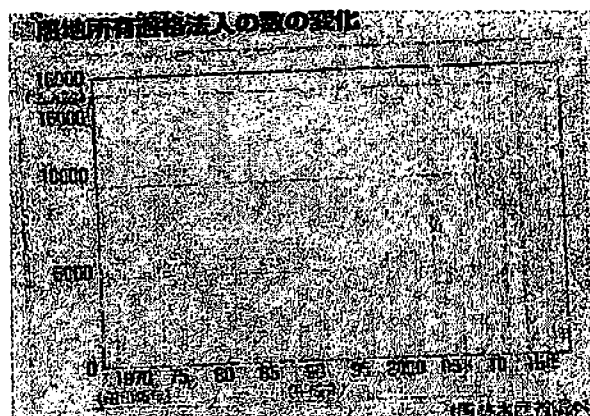
- ・ 農業で働く人数がどんどん減っている。
- ・ 専業農家もどんどん減っている。
- ・ 米を生産する量も、消費する量も減っている。
- ・ 米が売れないから農家を辞めてしまうのでは。

【第10時】



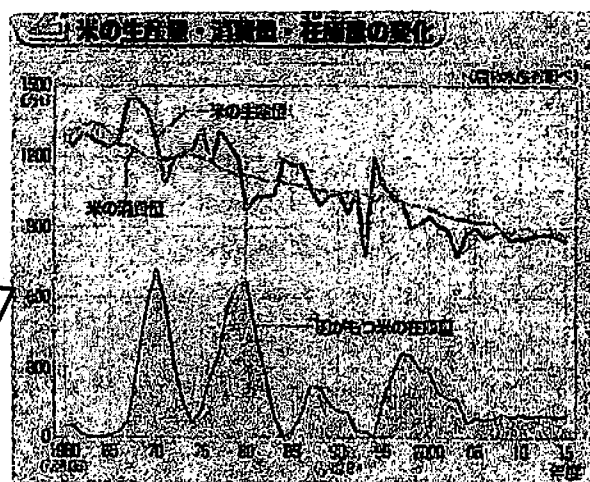
・自給率をもっと高くして、余ったものを海外で売れば良い。

・2007年から2015年まで増え続けているので、上手くいく。



・輸入している農作物（米）を自分たちで作るようにすれば売れる。

・日本の米は余るようになっているので、それを海外に売るようにすれば良い。



ゲストティーチャーについて

ゲストティーチャーの常世田正樹氏は2006年まで、東南アジアの農村開発に従事し、帰国した後に有限会社珠樹自然農園の農園を担当している。

会社概要

商 号	有限会社 珠樹自然農園
本 店	千葉県旭市鎌数10399番地 ビニールハウス
会社成立の年月	平成17年12月
目 的	1. 農産物および果実の生産、加工、販売 2. 畜産および畜産物の加工、販売 3. 肥料・飼料の製造販売 4. 農産物の売店経営 5. 地域の農産物を生かした食堂および喫茶飲食店の経営 6. 農業生産現場の見学会などのふれあい体験や生産者と消費者 および他地域との交流活動などのイベントの企画、制作、運営 7. 米穀の販売 8. 前各号に附帯する一切の業務
代表取締役	大矢 珠美
農園担当	常世田 正樹 岐阜大学大学院農学修士修了

参考文献・資料

- ・社会科重要用語300の基礎知識 (森分孝治 片上宗二【編】 明治図書出版)
- ・社会科教育事典 (日本社会科教育学会【編】 ぎょうせい出版)